

佐々友房と独逸学 — 熊本独学史より —

上 村 直 己（熊本学園大学非常勤講師）

Tomofusa Sassa und deutsche Wissenschaften — Aus der Geschichte der deutschen Wissenschaften in Kumamoto — Naoki Kamimura

はじめに

佐々友房（1854 - 1906, 安政元年 - 明治 39 年）は私学済々黌の創立者、国権党の指導者、九州日々新聞の 3 代目社長として特に熊本では尊敬されている。だが私見によると、佐々自身は独逸学者ではなかったけれどその熱心な信奉者であり推進者であった。その意味で佐々は熊本独学史から逸せられない存在である。熊本におけるドイツ語教育は明治 20 年（1887）5 月に第五高等学校の前身である第五高等中学校が設置されてから、本格的に開始されるが、それ以前の明治 18 年（1885）に、遅れていた熊本におけるドイツ語教育を遺憾に思い自らが黌長を務めていた済々黌にいち早くドイツ語科を開いた功績は特筆される。それだけでなく彼は英学、仏学、独逸学などの洋学について思索を巡し、彼独自の洋学観を抱くようになった。その中で特に独逸学を尊重したのは、ドイツ学術の優秀性もさることながらドイツ流の立憲君主制が日本の天皇中心主義の国体と似通う部分が多いと考えたからであった。また佐々ほどドイツ学生の風習である決闘についても深い関心を寄せ、これを称賛した人も珍しい。欧米視察から帰国後、佐々はドイツの政体を崇拜し国権的信念を固めたとされる。従来、佐々友房と独逸学の関係は殆ど取りあげられることはなかったが、彼の全体像を明らかにするためにはその方面にも光を当てる必要があると思い、小稿を草することにした。

紫溟会と独逸学協会

佐々友房は明治 10 年（1877）の西南戦争では熊本隊 1 番小隊長として西郷軍に応じ、肥薩の野に転戦したが佐々は負傷、宮崎で遂に獄囚に捕らえられたが、明治 12 年 1 月赦されて、帰郷。同年 12 月国家有用の人材養成を目的とした学校、同心学舎を同志と共に熊本に創立。同心学舎は「我が皇威の尊厳を益し我が国権の拡張を謀らんとす」（『克堂佐々先生遺稿』148 頁）るためであった。15 年同心学舎を発展させた私立中学済々黌を設立した。この間、14 年には国権論を唱えて民権論に対抗し、熊本において勤王・国権を一大主義とする紫溟会を有志と共に結成。天皇主権を主とする国権論を主張した。

折しも中央では明治 14 年（1881）9 月、躍進するドイツの国体と国風に親近感をもつ人、お雇いドイツ人、ドイツ留学生などを中心として独逸学協会が設立された。佐々は会員ではなかったが、その動きには注目していた。熊本県人で会員になった人には、山田信道、安東清人、藤村紫朗がいた。紫溟会の機関誌『紫溟雑誌』の 24 号（明治 15・10・21）25 号（同 15・11・1）

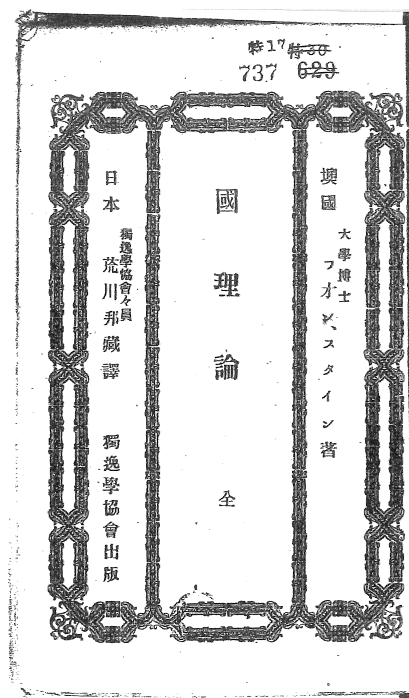
26号(同15・11・11)において3回にわり「雑記」欄に、荒川邦蔵¹⁾訳『国理論』(シュタイン原著)の全文が転載された。これは紫溟会の中心にいて言論人でもあった佐々の意向を受けたものであったと見てよい。冒頭に「国理論原ト奥国大学博士フォン・スタイン氏著ラハス所而シテ我カ日本独逸学協会委員荒川邦蔵氏訳スル所ナリ深く我中正主義²⁾ニ合フアルヲ喜ヒ重刊ヲ憚ラス之ヲ本雑誌ニ掲載シテ以テ看官ニ示ス」とある。最後に佐々と思われる編者は「明確縝密不易ノ論ナリ蘆騷カ契約説ヲ弾撃スル所尤モ痛快ヲ覚フ請フ看者軽々看過セス反復沈潜真意ヲ得ラレンヲ」と述べている。その主張に共鳴、会員達に熟読玩味するように求めているのである。国法論で知られるブルンチェリーについても言及も見られる。佐々はこの頃から独逸学に注目するようになったと見てよからう。ドイツ流の立憲君主制に共鳴していたことを示している。荒川訳『国理論』は明治15年7月、独逸学協会から出版された全21ページの小冊子である。原著は有名なウィーンの社会学者・法学者ローレンツ・フォン・シュタイン(Lorenz von Stein, 1815 - 1890)の行政書(1876)よりの摘訳である。『国理論』は明治中期の我が国におけるシュタイン流行を示す早い例であった。該書が出版される4ヶ月前には立憲制度の調査のために伊藤博文がヨーロッパに派遣され、ウィーンではシュタインの憲法や法制学の講義を聞いたことはよく知られている。

この時期の『紫溟新報』にはこの『国理論』を含め、ブルンチェリー原著、中根重一訳『政治学』、ブルンチェリー原著、平田東助訳『国家論』、シュタイン原著、木下周一・山脇玄共訳『兵制学』、シュールチェ原著、木下周一・荒川邦蔵共訳『亨漏生国法論』など独逸学協会の出版広告が明治15年10月18日発行の同紙37号に掲載されて以後、毎号のように見られる。そして紫溟会本部の名で「右ノ書籍今度東京ヨリ取下シ下通町細流舎ニ於テ売捌カセ候間御望ノ諸君ハ該店ニテ御購求相成度此段広告ス」と伝えている。当時の日本の代表的ドイツ学者の翻訳になるこれらの書物の講読を熱心に勧めていることは、紫溟会が、特にその中心にいた佐々友房がドイツの国体と国風に親近感を持ち、それに傾倒していたことを端的に示していると思う。

『紫溟新報』におけるドイツ情報

そのような状況を反映して『紫溟新報』にはこの時期ドイツに関する記事が多く見られる。内容的には、ドイツの政治・政治家、軍事、日本にけるドイツ語・学校、ドイツ留学生、お雇いドイツ人など関するものなど多岐にわたり、例えば明治15年～18年だけでも次のような記事が見られる。

「独乙の海軍」(明治15年12/21)「独乙海軍を拡張」(16年1/23)「鉄道電気燈」(2/13)「独逸皇帝譲位」(2/17)「日耳曼の士風」(2/20)「デーネッツ氏手術」(3/7)「国体ヲ忘却スルナカレ」(3/20)「独逸普通商法」(3/23)「独逸新任公使」(4/13)「独逸陸軍の辞職」(4/18)「普仏戦争の統計表」(4/19)「独逸学ノ利害及国家ニ対スル得失」(リ



『紫溟雑誌』に3回にわたり全文が転載された
フォン・シュタイン『国理論』(独逸学協会出版)

ヨースレル) (5/16, 5/18 ~ 5/20, 5/22 ~ 5/24)「村上珍亮氏物故」(6/5)「ビスマルク氏の政略」(7/27, 7/28)「日耳曼の策略」(8/2)「伊藤参議ノ帰朝」(8/12, 8/14)独相ビスマルク侯の近状」(8/16)「独逸専門学校」(8/21)「地質学士エドモンド・ノーマン」(9/5)「テッヒョウ氏」(明治17年2/7)「ビスマルク氏」「独乙学校」(5/15)「私立独乙学校」(5/16)「古今集の翻訳」(明治18年1/20)「独逸式」(2/22)「私立薬学校」(3/24)「警察練習所」(4/10)「伯林だより」(古荘韜) (5/15)

これらの記事は主に「外報」「雑記」「雑報」欄に掲載されたもので概して短いものだが、ほかに見出しのないものもありそれらを含めるとその情報量はもっと増える。

前述した『紫溟雑誌』に転載された『国理論』(シュタイン)と並んで『紫溟新報』において注目すべきは、明治16年(1883)5月17日から断続的に7回にわたってリョースレル(ロエスラー)³⁾の「独逸学ノ利害及国家ニ対スルノ得失」を連載していることだ。「まえがき」に云う。「左ノ一篇ハ独逸学協会栄誉会員独逸大学博士リョースレル氏カ独逸学協会ノ春期総会ニ於テ演説サレタルモノニシテ頗ル我党カ夙ト二期スル所ノ大意ニ付合アルヲ以テ長篇ヲ厭ハス四方ノ同好ニ公示ス」とある。この資料は『独協百年』第2集に収録されているが、それを見ると明治16年5月における独逸学協会春期総会においてロエスラーが演説したものを荒川邦蔵が翻訳筆記したのを5月12日に独逸学協会から出版したものであったことが分かる。ロエスラーはの中でヘーゲルやサヴィニーを引用しながらドイツ国家学の優越性を最大限に称賛している。彼によれば、その特質は「国家の統一」を強く求める点にあり、従って「国権分割ノ説」を奉じるイギリスやフランスとは全く異なっていた。これは独逸学協会の基調方針ともいうべきものであり、紫溟会はそれに共鳴していたのである。

済々黌における独逸学科の開設

済々黌では前身の同心学校(明治14年2月開校)以来外国語としては中国語と朝鮮語を教えていた。佐々の『済々黌歴史』(明治21年)によれば、明治18年9月に至り規模及び組織を拡張し、学科を改正し皇漢学、独逸学、英学、支那語学の4科を併立し、各6級とした。そして山縣良蔵を山口から招聘し独逸学を担当させた⁴⁾。これが熊本におけるドイツ語教育の殆ど最初であり注目される⁵⁾。

佐々の独逸学観は、彼が明治18年(1885)冬に済々黌にドイツ語科を開設する際に行った「独逸学科を設けし時の談話」(『克同佐々先生遺稿』)によく現れている。これには「明治十八年冬、済々黌始て独逸学科を設け先生独逸学科生徒を集めて左の如き談話を為したり。」との前書きがある。

諸子は今より独逸学を研究するの途に上りたり。定めて専心一意を以て孜々勉励此の学科に熟達し以て内は一身の智識を益し外は社会の利益を^{はか}劃らんとするの希望を懐き居るならん。今や独逸学の勢力甚だ盛にして都鄙の諸学校到る処に之を教授せり。而して之を学習する者は固より其の学科の貴ぶべきを知りて之に従ふには相違なかるべしと雖も稀れには一時の風潮に動かされ自己一定の見識なく、徒に只だ他人の之を学ぶを見て漫然之に倣ふの徒亦た之れなきに非ざるものの如し。然れども諸君は皆な一定の見識を有するものなり。決して一時の風潮に動かされて之を学習するにあらざる事は予の深く信じて疑はざる所なり。実に独逸国は他の諸外国に勝れて完全なる學術を有し、独り医学の一科を以て其名を世界の學術界に高くするのみならず、政

治、経済、法律等の諸学に至りても、亦た大に進歩の名を博せり。殊に其の立国の本体頗る我国に似たるものあり。故に斯学を講じ、斯文を修めて、能く之を我国に利用するときは其我国の文明を裨補し我国の開化を増進すること、決して疑を容れざるなり。諸子は今や此の学を学習するの途に上る。宜く大に其の勉強力を鼓して深く造詣する所あらざるべからず。

然れども学ぶ者は患ふる所は其の学ぶ所に溺るゝより大なるはなし。若し夫れ一度び其の学ぶ所に溺るゝときは其の学習する所甚だ広く其の研究する所甚だ深しと雖も、其の識見偏僻に流れ固陋に陥り徒に學術を懷て、迷妄の淵に投じ一も世道に益し人事に補あらざるのみならず其の極や、遂に社会の禍害を醸し国家の進歩を妨ぐるに到るなきを得ず。是れ学者の深く戒め大に謹まざるべからざる所なり。而して今や世間の学者社会の状態を目撃するに往々其の学習する所の国語を以て相共に流派を分ち党類を立て英学者は仏学者と反目し仏学者は独逸学者を嫉視し、未だ其の説の正邪と其の論の是非とを究明分析するを^{もち}煩ひずして、徒に其の学ぶ所の国語相異同あるを見て直に之を取捨黜陟せんとするの傾あるを見る。是れ豈に或は其の学ぶ所に溺るゝの弊に陥りたるものにはあらざるか。夫れ独逸学なり英学なり仏学なり齊しく是れ外国の學術なり。其の説の善なるものは宜く之を取るべし其の説の善ならざるものは宜く之を捨つべし。亦た何ぞ其の間に輕重する所あらんや。然るに其の学ぶ所に媚びて其の学ばざる所の者を排し、己れと其の学習する所の源を異にするを見て、直に之を敵視するが如きは其の局量実に狭量にして、其の識見実に偏僻の甚だしきものと云ふべし。此の如くして其の学ぶ所を以て社会の文明を進め国家の開化を助けんと欲す、恰も西に行かんと欲して其の馬首を束するが如し。

佐々はここでこれから独逸学（ドイツ語）を学ぶ際の心掛けを述べている。今や独逸学が益々盛んになって都会でも田舎でも諸学校で独逸学が教えられるようになった。これを学ぶ者はその学科を尊重して学習するには違いないと思うが、中には一時の風潮に流され漫然と学ぶ者もいる。そしてドイツ學術の優秀性を強調しながらもそれに溺れてはならないという。英学、仏学、独逸学といってもひとしく外国の学問だ、いいところは採り、善くないものは捨てればいいという。自分の学ぶ学に拘泥して他を敵視するのは狭量で、偏僻の甚だしいものだ。こういう意見が言えたのは佐々自身が英学者、仏学者、独逸学者などのような洋学者でなかったからであろう。

山田珠一は「学生気風の変遷」⁶⁾と題する講演で佐々が濟々鬢にドイツ語を導入した理由について次のように述べている。

それから外国語には英語を用ひて居る事は当り前ですが、独逸語等を用ひてをる事は一寸面白いと思ひます。私共を初め安達君や今故人となつて居る鳥居君、外務省に居る上田仙太郎君その他大部独逸語をやつた者も多かつたのでありますが、これはどういふものであつたか今から考へますと兎に角明治十三年頃は、政治論が盛んで殊に憲法論等が盛んであつた様でありますが一歩進んで進歩主義を唱ふるものは頻りに民権自由の説を主張し、或は仏国の民約論といふ様な新らしい学説をもつて唱道して居り、それに対して独逸流の学説所謂国粹主義の学説は日本の国体はいくらか援くるに都合の良い学説が、独逸にあつたといふ事は御承知の通りであります

すが、まだその当時は独逸の学問をやっているものは余り多くなかったのでありましてブルンチリーの国家学、之れがその当時一部の人から尊重され私共もよく読んだ事があります。さういふ様な点から殊に済々黌に独逸語をおいたのではなからうかと考へれば考へられるのであります。が要するに支那語といひ独逸語といひ朝鮮語等を教へたのはこれは全く佐々先生が普通の教育家とは違ひ、即ち志を早くからこの方面に向け自ら国家の事にあたられ、さういふ事に非常に志されたといふ事が之でも解るのであります。

またこの時ドイツ語を学ぶために済々黌に入学した沼田團太郎は「独逸研究の先鞭」(『克堂佐々先生遺稿』)において次のように証言している。

先生が我日本の世論に先立って朝鮮、支那の研究に関心を持たれたのは前述の通りありますが、又東洋の大勢のみでなく、早く世界の大勢に注視せられ、親しく研究され、ドイツが将来如何に発展して行くかをこの時既に洞察され、新興日本も大いに独逸を研究する必要があるとて、当時全国の学校の先鞭を付けて、済々黌に独逸語の科目を特別に設けて、生徒をして、支那語朝鮮語と分けてその研究にあたらせたのであった。

この時代は、済々黌としても創立日尚浅く、非常に経済的困難に陥つてゐた。(略) この財政難のうちにも、支那語独逸語に大いに力を注がれ、他県から一流の人を高い俸給でもって招聘された。(略) 独逸語には山口県の子山先生を態々招かれた。山縣先生の俸給の如きは、確か四十円も出して居られたと聞く。ですが当時の四十円と云へば誠に大金で、巡査の月給が六円であつたのを見てもわかると思ひます。済々黌の財政難のうちから、而も僅か三十幾名位の爲めに、独逸語一科目のために、こんな大金を支出してゐた事實は、先生が如何に生徒を愛し、その将来を思ひ、教育に熱心であつたかを知ることが出来ると、私は思ひます。

財政的に苦しかったにも拘わらず佐々黌長は生徒たちのためを思って高い俸給で一流のドイツ学者を雇い入れたという証言は記憶されてよいであろう。

済々黌のドイツ語教師たち

こうして明治18年に済々黌にドイツ語が導入され、山口県人で、東京で翻訳の仕事をしていた独逸学者山縣良蔵を高給で雇い入れた。沼田が「一流の人」と呼んでいる人である。山縣が東京から熊本に着いたのは当時の新聞によると明治18年9月6日で、8日から授業を開始した⁷⁾。以後山縣は熊本にあって明治21年末辞職するまで約3年間にわたり授業はもとより翻訳、通訳とドイツ語に関しては佐々の期待に応じて活躍した。佐々は山縣のドイツ語を深く信頼していたようだ。

当時済々黌系の雑誌に『大東立教雑誌』(編集人・安達謙蔵)というのがあつたが、佐々黌長の影響であろうか、かなりドイツ色が見られるようだ。その第1号(明治20年1月)に山縣は独日両文で「済々黌について」(Von Seiseiko)、1号と2号(明治22年3月)に翻訳「ロエスレル氏経済学講義」をそれぞれ寄稿している。また明治21年5月ウィーンの碩学ローレンツ・フォン・シュタインの息子エルンスト・フォン・シュタイン(Ernst von Stein, 1857 - 1929)が来

日し、来熊した際には山縣は付きっきりで通訳した⁸⁾。

明治19年(1886)9月、済々黌ではまた学科を改正し、皇漢、独、英、支の4学科並びに予備門を廃し、合して普通科として5カ年の課程とした(従来は3年)。科目中外国語は英語とドイツ語だけとなり、「支那語」は廃止された。この時英学教員2名、独逸学教員1名が招聘された。『済々黌歴史』によれば、独語教員としては山縣良蔵に次いで明治19年に武田賢象が、20年に藤本末松と藤本友世が就任した。『創立三十周年記念多士』(明治45年6月)掲載の「旧職員」欄(35-59頁)からドイツ語担当者を挙げると次の通りである。数字は就任時期。

山縣良蔵(明19.9)

武田賢象(19.9)

中川龍田(20.4)

藤本末松(20.4)

藤本友世(20.4)

ただし藤本友世の就任時期は誤記で、履歴書によると正しくは明治21年5月7日付である。

済々黌においてドイツ語を担当したのはこれら5人の教師であった。

だが、5人のうち『済々黌歴史』所収の「済々黌現時職員教員名録」(明治21年5月)では独語教員として山縣良蔵、独語・英語助手として藤本友世の二人の名前があるだけである。さらに『済々黌一覽』(従明治22年至明治23年)では英語・独語担当の藤本友世だけとなっている。

これから判断して武田賢象、中川龍田、藤本末松が教えた時期は明治20～21年頃のごく短期間(約1年)であったこと、それに済々黌のドイツ語教育が盛んだったのもその頃であって、明治20年10月の熊本県尋常中学校となって以後、急速に衰退していった。

ところでこれら5人の教師の関する資料、特に履歴書は現在の済々黌高校には残されていないが、両藤本は一時第五高等中学校(明治20年5月設置、同27年9月第五高等学校と改称)でも独語を担当したことがあったので、その関係で五高記念館には二人の履歴書が残されているので主にそれにより、中川龍田については井上昌彦『オーソリチー』(昭和2年、熊本県立図書館蔵)の記述によりプロフィールを紹介したい。山縣良蔵については筆者独自の調査によって略伝をまとめたことがあるので、ここでは簡単に略歴を記しておきたい。

武田賢象についてはよるべき資料がなく、経歴等不明である。恐らく医学畑の人であろう。

山縣良蔵(1846-1930)

現在の山口県厚狭郡山陽町生まれ。山縣家は代々厚狭毛利藩の家臣であった。明倫館で英学を修めた後上京、大学南校教師カデルリーに独語を学ぶ。明治8年私塾の独逸学教師となった。明治14年以後大蔵省に勤務し、主に統計の仕事をした。その関連で相原重政、呉文聡、依田昌言らと交流、独語論文の翻訳に従事。『諸官庁訳書目録』(明治22年、国会図書館蔵)には山縣訳の論文6篇を収める。明治18年9月佐々友房に招かれ、熊本済々黌初代独語教員に就任。ウィーンの公法学者のシュタインの息エルンストが来熊の際は通訳を務めた。済々黌時代はドイツ学者として佐々の片腕となって活躍したが、明治21年末辞職し、郷里山口県厚狭に帰り村長などを務めた。

藤本末松(1864-1894)

熊本県下益城郡堅志田村生まれ。明治11年1月から同年5月まで熊本医学校に学び、その後上京、本郷台町の独逸学校入学。次いで東京外国学校に入り、ブルゲルマイステル、池

田正友、高木計に指導を受けた。明治14年5月より19年3月まで東大医学部予科及び大学分黉でオットー・ゼン、プッチール、グロート、川上正光、吉田謙二郎についてドイツ語修業。明治19年11月熊本県立中学校のドイツ語教授を委嘱された。次いで尋常中学済々黉、第五高等中学校の独語の嘱託講師となった。学歴から見て山縣に次ぐ語学力の持ち主であったと想像されるが、それを発揮しないまま終わったの惜しまれる。明治27年9月8日病没。

藤本友世（1866―没年不詳）

慶応2年8月4日肥後国上益城郡御船町生。御明治12年御船小学校卒。私立同心学舎及び済々黉において4年間皇漢学修業。明治16年7月より東京の有非学校及び予修学校においてドイツ語を5年間修め、傍ら東京英語学校に入り英語を学んだ。その後郷里にあって津田静一、英人ウエストンについて英文学を研究。明治21年5月済々黉嘱託教員。24年11月私立九州学院普通教師を委任される。27年4月尋常中学済々黉助教諭。同年9月第五高等中学校の独語授業をせらる。28年4月済々黉天草分黉教諭に就任。42年4月天草分黉が独立し熊本県立天草中学校と改称した際、校長となる。

中川龍田（生年不詳―1930）

八代の人。熊本医学校を明治18年9月抜群の成績で卒業。資性豪快闊達、加えて頭脳明晰行くところ可ならざるはなく、その後福岡医科大学の大森博士の許で研鑽を重ねた。名声噴々忽ち南九州の刀圭界を風靡した。郡医師会長、田日本医師会代議員、熊本県医師会評議員等を歴任。昭和5年5月物故。同年6月発行『鎮西医海時報』第36号掲載の死亡記事に、「八代町医界の元老にして且政友会八代郡支部長として医、政両界に隠然たる勢力を有したる同氏…」とある。

使用教科書については確かな記録がないが、当時一般であったヘステル読本とシェーフェル文典が用いられたのではあるまいか。済々黉系の『大東立教雑誌』5号（明治20年9月）の巻末の生徒募集公告には、学科を改正して第五高等中学校へ入学する階梯としてヘステル読本3で入黉試験を行うとの記載がある。

ところで、済々黉において独語を学んだ人として山田珠一は前記「学生気風の変遷」の中で安達謙蔵（政治家）、鳥居素川（ジャーナリスト）、上田仙太郎⁹⁾（外交官）を挙げているが、後年私立熊本薬学校の独語教授となった上田茂次郎（1870―1941）もその一人であったようだ。5高記念館蔵の履歴書によると、上田は明治19年7月皇漢・数各科卒業後、同年9月普通科設置に付きさらに普通科に転じ2年間修業。22年2月独逸学協会学校に入学。普通科を経て、明治28年7月専修科を卒業している。このとき上田仙太郎も一緒に卒業した。

第五高等中学校の設置

前述のようににおけるドイツ語教育は明治20年頃がピークで、その後は新たに設置された官立の第五高等中学校にその中心は移り、済々黉のドイツ語教育は衰えていった。その理由としては佐々がドイツ語教育は県立の尋常中学である済々黉よりも官立の第五高等中学校で行うのが適切であると考えようになったようだ。それを窺わせるのが佐々の演説「第五高等中学校ノ設置」（『大東立教雑誌』4号、明治20年7月）である。これは同校の熊本設置が決まったのを受けて佐々が済々黉の生徒たちの前で行った演説である。日本は中央集権のために東京

には大学をはじめ公私の専門・普通の学校が多数あるが、地方には普通学校を教える低度の学校があるだけで、進んで高度の学科を授ける学校はひとつもない。しかし教育に都鄙の別があつてはならない、地方の学校でも設備を整え、校長、教師に人を得れば中央に劣ることはない、と佐々は述べ、ドイツの例をを引きながら次のように続ける。

彼ノ独乙ノ如キ全国二十五ノ大学校ハ能ク各地ニ配置シテ辺僻ノ大学モ柏林ニ在ル者ト異ナルコトナシト云ヘリ是レ則チ文明国ノ常ニシテ若シ此ノ如クナラサルモノハ実ニ不幸ノ国ト云フヘキナリ我国ノ如キハ開明ノ度尚低ク之ニ加ルニ国力未タ充分ナラス是ヲ以テ是レ迄ノ勢高等ノ学校ハ独り東京ニアリテ全国ノ書生ヲ一所ニ集合セサルヲ得スト雖国運漸ク進ムニ従ヒ人文益々開クルニ応シテ勢文明諸国ノ如ク各所ニ高等学校ヲ置キテ人物ヲ地方ニ分配セサルヲ得サルナリ

さらに佐々は明治21年10月10日、第五高等中学校の入学式で同様な趣旨を敷衍した祝辞¹⁰⁾を述べた。「諸君は優秀な成績で入学したが、これから5、6年が大事であつて、この間鋭意奮励して良い結果を残して欲しい」と前置きして次のように言う。

抑々我邦維新以来中央集権ノ政体ヲ組織シタレバ都鄙ノ間ニ甚シキ不均合ノ差別ヲ生ジ独り政治上ノ事ニ止マラズ学問上ノ事ニ至ルマデ大ニ其影響ヲ及ボシ天下ノ学生争テ東京ニ遊学スルノ有様トナレリ此時時勢上已むムヲ得ザルモノアリト雖モ為ニ前途有望ノ青年子弟ヲシテ彼ノ柔情浮薄ナル都会風ニ化セシメ或ハ身体ヲ柔弱ナラシメ一生業務ヲ執ル能ハザラシメ或ハ道德品行ヲ修メズ為メニ一身ヲ誤マリ一家ヲ亡ボスモノアリ其弊一ニシテ足ラザルナリ

ここで佐々は教育面での東京一極集中の弊害を指摘し、するどく批判しているが、これは本質的には現在でも続いている問題だけに、その先駆性は注目されるし、さすがと思わせる。そして佐々は文部大臣の意向で全国各地に官立の高等中学校が設置されたことを歓迎し評価している。この時熊本に設置された第五高等中学校では初歩からドイツ語が学べるようになった。そのため佐々は独語は尋常中学校の済々黌よりも第五高等中学校で教授する方が相応しく、合理的と考えたのではあるまいか。それに財政的に苦しかった当時の済々黌にとっては独語教師を雇うことは困難だったであろう。

かくして熊本におけるドイツ語教育の中心は第五高等中学校に移り、このあと済々黌のドイツ語教育は急に振るわなくなった。前述したように『済々黌一覽』(従明治22年至明治23年)ではドイツ語教師は英語・独語兼担の藤本友世だけとなった。加えて独語教育の導入に熱心だった佐々自身、明治22年1月には古荘嘉門と熊本国権党を結成、国政進出を目指すようになった。そして同年3月には済々黌の黌長を辞任した。次いで23年7月第一回総選挙で当選し、以後政治活動が中心となった。そういったわけで済々黌のドイツ語教育は明治20年代末のを以て終わりを告げる。その後は済々黌で再びドイツ語が教えられることはなかった。だがしかし、佐々が熊本においていち早く済々黌に独逸学を導入した事実は記憶されてよい。

ところで、前記第五高等中学校の入学式での佐々の祝辞は次の言葉で終わっている。

九州人士ハ堅忍剛毅ノ氣象ヲ特有スルモノナリ此氣象ヤ各種ノ事業ヲ達成スルノ原

力トナルモノニシテ彼ノ精細緻密ノ思想トハ決シテ相衝突スルモノニアラズ否相須テ完全ノ働キヲ為スモノナレバ諸君ハ願ハクバ此氣象ト彼ノ思想トヲ混和調合シテ鞏固確乎タル万事ノ一大基礎ヲ築カン事ヲ斯ノ如シテ上進發達セバ他日全国人士ヲシテ我九州人士ノ後ニ瞠若タラシムルニ至ルハ予ノ決シテ疑ハザル所ナリ

ここには後年ベルリンにおいてドイツ学生を決闘を実見し、これを武士道に通じるとして称賛した佐々の気持ちが既に現れている。つまり剛毅である。この剛毅と精細緻密の思想は衝突するものではなく、両者相用いて、混和調合して将来確乎とした事業をなす基礎をつくるのが肝要だ。そのようにして成長し、發達して行くのが九州人士だと説くあたり情熱の教育家佐々友房の面目躍如たるものがある。

「独逸学の盛衰」

『九州日日新聞』（熊本）の前身『紫溟新報』に明治21年（1888）5月29日より31日まで3回にわたり「独逸学の盛衰」と題する社説が掲載された。署名はないが恐らく著者は佐々友房であろう。理由は趣旨が前記「独逸学科を設けし時の談話」を敷衍し、より詳細に述べたものであること、掲載された『紫溟新報』は佐々が明治14年（1881）に創設した政治結社「紫溟社」を背景とする国権派に新聞であり、佐々は顧問であったこと、さらにこの種の問題に関心を寄せ、それについての論文を書く人または書きうる人としては当時の熊本には佐々以外には考えられないことによる。

以下、内容を要約しつつその主張を検討したい。なお引用に当たっては現代表記とし、句読点を補った。

最初に著者は、欧米各国は概して文化興隆の国だが、學術・技芸には精粗優劣の差があることは否定できないとして次のように述べる。

吾人が窃に聞く所を以てすれば、米国の学芸は之を英仏に比するときは精緻の点に於て歩を譲る所あり。英仏の学問は又之を独逸に望むときは其深遠高尚の点に於て其等を減ずる所あり。然らば即ち單に學問の一点を觀察を下し浅近よりして深遠に進み粗簡よりして精緻に進むと云ふ智識進捗の定則に従ひ我邦學問が始めは専ら米国に採り、漸く進んで英仏二學となり遂に進んで独逸學となり。特に一昨年に至りて獨學大に流行せんとしたるものは又た怪むに足ること無し

だが欧米各国の学芸には上記のように精粗優劣があるといっても、それはもとより一般論であって詳細に検討すれば一長一短が見つかるに違いない。著者はこう前置きしてから、我が国では欧米各国の学芸を批評してこれを取捨する際、學問の価値に依らずその国の政治制度に依ってする者があるが、これほど間違ったことはない。我々が米国を学ぶのは米国の共和制を慕うからではなく、仏學をなす者は仏国の革命を学びたいからではない。また独逸學を勉強するのはドイツ流の政治を我が国に移したいからではない、とした上で著者は次のように主張する。

左れば其邦の政治社会は如何なるものにせよ只其學問を取るものなれば學問さへ精緻深遠なる所あれば英仏獨米我に於て何か有らんや。且つ夫れ我邦にして彼の欧米各國の學問を探るには一国に偏するよりも寧ろ數國の長所を集めて以て我邦の一大美事

をなすこそ現今の急務にあらずや。然るに今や世の論者は或は独逸学を排斥して独り英学を主張し以てらく独逸の哲学、文学、科学は其理深遠ならざるにあらず精緻ならざるにあらず、然れども其我邦に盛んならしむ可らざるものは其政治の武断圧制に傾くを以てなりと。抑も是れ何等の僻見なるぞ独逸の学問と政治との間には必ず離る可らざるの関係ある者にあらず、而して今や論者は必ず此間に離る可らざるの関係あるを主張し以て独逸学を排斥せんとするか。

ここには既に一部は「独逸学科を設けし時の談話」にも見られたが著者の洋学観がよく示されている。政治社会が如何なるものにせよ学問が精緻深遠であれば英学でも、仏学でも、また独逸学でも我が国にとって同じで、むしろ一つに偏るのは問題であり、これらの長所を集めて大事をなすことこそ急務であろう。然るに深遠で精緻な独逸学を、ドイツの政治が武断圧制的傾向があるからとの理由で排斥するのを批判している。これは具体的には後述する森文部大臣の独語に代わる英語重視の方針を指していると思う。

次に英学が盛んな理由についてこう述べている。英学が盛んなのは必ずしもそれが深遠、精緻、高尚であるからではない。一つには英語が最初に学んだ語学だからであり、二つには英語が広く通じ、商業上、交際上最も利用されるからだろうという。官私学校で英語を教えているのは全くこうした理由からだろう。何故英語と並んで仏独両語も用いないのかと思う者もあるかも知れないが、それは無理な話だ。普通教育というものは専ら普通の知識を授けるのを目的とするものであって、広く各国の語学を授けて徒に脳髓を消費する所ではないからだ。この観点英学が隆盛なのは理由のあることだ。だが、欧米では専門の学問を修める者は大抵数カ国語に通じ、その長所を集めて研究資料とするので、その学問は一層精緻となり、規模も広大となっている。従って我が国でも今後は独り英学のみを以て足れりとせず、「苟も専門講学の士と称せらるゝものなれば少くとも英仏独三ヶ国位の語学に通じ其の知識を詰め其の研究に供するの資料とせんことは吾人が深く希望する所なり」という。

その理由は(1) 欧米各国の学術・技芸にはそれぞれの特徴があり(2) 一国のの学に偏すれば自ずから偏見が生じて、知識の発達を妨げることになり(3) 日本の学問の独立を図るなら各国の粹を抜き、長を採って日本独自のものを作り出すべきだからだ。そのためには三カ国語を兼修しなければ到底不可能だと考える。だが我々が最も恐れるのは、英仏独各国の語学を盛んにすることは学問のために喜ぶべきことだが、英学者、仏学者、独逸学者が各々その学ぶところを尊崇する余り、その国の政体制度にまで心酔し、これを讃美し、模倣し、遂に我が国にもこれを実行しようと思っていることだ。

このように述べ、その具体例を挙げて彼らのことを痛烈に批判している。

試みに見よ、英学を学ぶものは英国の憲法議院を以て最上無比とし甚きに至りては其社会日常の細事に至る迄之れに倣はんと欲し所謂テームス橋上繁華の光景、ウェストミンスター英雄偉人の墳墓マンチェスターの噴筒^{ふんとう}天を衝き其貿易製造の有様は常に彷彿として其の夢裡に往来し遂に我邦を挙げて尽く英国たらしめんと欲す。而して仏学者が十九世紀の末期に於て学問智識^{はるか}適に前代に超絶し非常の進歩をなしたるにも係はらず猶ほモンテスキュ、ウォルテル、ルウソウ等が陳腐の書を以て金科玉条となし常に其革徒に独逸の哲学、文学、科学に心服するのみならずビスマーク侯が権謀術数^{へん}を以て無上の政略とし所謂国家社会主義及び官吏主義に傾向を生ずるが如きは是其偏

僻^きの最も大なるものなりとせざるを得ず

要するに著者が求めたのは、欧米各国の学問を摂取することと、その制度を取り入れることは区別し、この二つを混同しないようにということであった。

著者によると、独逸学が3、4年前から俄に盛んになったのは、当路者がドイツの政体制度を採用し、これを模倣しようとした結果に他ならない。抑もこれまでの英学や仏学、また独逸学が民間で消長盛衰するのは炊いて政府が上から及ぼした影響のせいであって、例えば政府が英国の制度に倣うとして英学者を登用すれば「英学忽ち勃然として色生じ」、また政府が仏国の法律を採り、仏学者を挙用すれば「仏学の景気が善くなる」というのは周知の事実だ。独逸学の流行もこれに他ならない。こう述べて著者はそうした傾向を批判した。

然るに森有礼が文部大臣に就任（明治18年12月22日）して以来、教育の方針が大きく変わり¹¹⁾、従って学問の好尚にも変化が現れ、一時隆盛を極めた独逸学が次第に衰勢を顕し、これに引き換え英学は非常な流行となり、「其の勢滔々として天下に敵なきが如し」だ。この社説が「独逸学盛衰」となっているのもそれと関係がある。

さて、「独逸学の盛衰」の著者（佐々）の主張は、英学にしろ、仏学にしろ、また独逸学にしろその消長盛衰が政府の影響を受けたものであってはならないこと、そして、それぞれ学には特色があるので長所を取り入れるようにすべきだということにあった。従って、「是に由りて之を觀れば彼の如く独逸学が一時隆盛を極めたるも其の源因を問へば亦た政府が及ぼしたる影響に外ならず而して其の流行の過度なるは所謂需要供給の理に外ならざるを以て今日此学が衰頽^{すいたい}を致すも亦た至当の理なりと謂はざるを得ざるなり」と言えることになる。需要供給の理とは、政府の影響で独逸学が推奨されると、ドイツ語を学ぶ者が増え、反対に英学が奨励されると、英語学習が盛んとなり、そのあおりで必然的にドイツ語学習熱は衰える、といった意味で使われている。

だが著者（佐々）は、政府の好尚の変化に係わらず、独逸学の本当の価値はそれに左右されないとする。哲学、文学、科学等の「深遠精緻なる智識」を得て専門的学問に従事しようする場合は到底独逸学を廃することは出来ない。著者によれば、今の独逸学の衰頽は一時的なものであって、我が国の学問が漸次進歩するに従って独逸学が益々隆盛になることはこれ又必然の理であるから、吾人は独逸学の長所を称揚し、その美を賛嘆し、その隆盛を祈らざるを得ないとして、次のように言う。

試に見よ哲学の深奥高尚なる孰^{いず}れか独逸に如くものあらんや政治経済法律諸学の完全確實なる孰れか独逸学に及ぶものあらんや而して医学の最も進歩を致し神学の最も高尚の点に達したる亦た独逸を推して文明世界今日学問の祖とせざるを得ず是れ又た吾人が私盲にあら^{すなわ}ず乃ち天下の公論と謂ふ可きなり。

然るに今日政治上漸くドイツ流を嫌う者があって、これを反駁した結果、その弊害が至る所に見られるようになって、その影響が独逸学に及ぼうとしていると言う。

そして最後に、「吾人豈^あに独逸の学問と其政体制度との間に於て判然たる区別を立て之を堤防として怒濤狂瀾の反動力を遮遇せざるを得んや」と決意を述べ、この社説を終えている。



ドイツ学生を決闘を伝えた佐々友房の書簡
明治30年7月22日付『九州日日新聞』

ドイツ学生を決闘と飲酒會

衆議院議員の佐々は1897年(明治30)藤村義朗と共に欧米視察旅行に出かけた。年譜¹²⁾によると、同年2月20日に東京より帰郷。3月14日長崎出港、上海、香港、シンガポール、コロンボ経由、5月8日マルセーユ着。仏独露英米を巡り、12月20日帰着。

佐々はベルリン滞在中ドイツ学生を決闘を見て深い感銘を覚えた。それで彼はその時の模様をベルリンから故郷熊本の『九州日日新聞』へ書き送ったが、それは7月22日付の同紙の第一面に「佐々代議士の書信」として掲載された。内容は佐々がベルリンで実見し、体験した「独逸学生を決闘と飲酒會」について報告した記事であった。同記事は同年9月号『中学新誌』(中学新誌社)にも全文が転載された。

ドイツ学生を決闘の風習は武士道に通じるものがあるとして詳しく伝えたこの手紙は、内容的に興味深いと同時に彼の親独振りを窺わせる史料として貴重と思われるの紹介したい。これには「伯林より六月七日を以て発したる佐々代議士の書信昨日到着したれば左に掲載す」と断り、「ベルリンでは多忙で新聞への寄稿もままならぬがドイツ学生を決闘だけはお知らせしたい」との佐々の前書きがある。

佐々は本文冒頭で「当国に決闘の流行する事は兼々承及候へば」と述べているように、かなり以前からドイツ学生を決闘の風習に関心を抱いており、一度実見したいと思っていたようだ。それは彼がまだ熊本の済々黌の塾長をしていた明治20年頃のこと、当時済々黌教育雑誌『大東立教雑誌』の第5号と6号(明治20年9月、10月)に古莊韜¹³⁾の「独逸通信」が掲載されており、イエーナ大学における決闘について詳しく伝えられていた。古莊韜は、国権論者として佐々と並称された古莊嘉門の長男であってドイツ留学中であつた。イエーナ大学は特に決闘の盛んな大学として有名であつた。佐々は多分この古莊韜の「独逸通信」によって決闘の存在を知ったのではあるまいか。安達謙蔵によると、当時済々黌生徒たちは銃器を携えて佐々塾長と共に行軍し、菊池神社に詣でて、正観寺に武光公の墓を弔い、更に転じ山鹿町に至り、二泊の行程を終えて帰郷したことがあつた。行軍中は当時流行の軍歌を高唱し、志気凛然、菊鹿の山野を圧する観があつた。また、その頃ドイツに留学中の古莊韜の手紙を読み、ドイツ学生の意気盛んな様子や、祝日には祝祭歌の合唱が盛んであることを知ると、佐々は安達

らに対して、軍歌や唱歌が必要だという空気を済々黌内に広めるように命じたという（『克堂佐々先生遺稿』）。それから10年後、実際に独逸学生の決闘を見る機会が訪れたわけである。

さて佐々がパリ経由でベルリンに到着したのが同年5月22日。3週間のベルリン滞在中、近郊の見物や来客の応対など多忙な日を過ごした。そのような中、5月27日佐々は日本公使館雇いのドイツ人で、学生時代はブランデンブルク党という学生団体の幹部だったヨウナス氏の案内で、藤村義郎¹⁴⁾、外交官萩原守一¹⁵⁾と共に某街の決闘場へ赴いた。「場へ入れば決闘は既に始めつゝあり、満場の血臭、石炭酸に和し紛々鼻を撲ち来れり、生等の至るや満面刀痕を帯たる廿一二歳乃至廿八九歳迄の壮士六七十人、（皆大学生にして中には鬼を欺く魁偉男子もあり、或は紅顔の美少年もあり、）各々帽を脱し、手を握り敬礼を表する様子、実に殊勝気に相見へたり云々」。

さて、佐々は決闘の様子を次のように詳細に伝えている。

其方式を観るに双方其眼目及咽喉丈けは器械を以て堅く防衛し居れり、その立会の距離は三尺位に過ぎず、左手は背に廻し独り右手にて二尺七八寸の真剣を握り両々直立して、敵手の双頬並頭顱^{とうろ}を斬るを目的とす、尤も双方に介添人あり、我邦角力の行司の如く其機を観、万般の指揮を為せり、又流石医術の開けし国にて医者数人左右に立並び、時々双方の刀痕深淺を探り、致命に到るの恐なきものは幾度となく継続せしむるの権を有す、時間の如きは十四五分乃至二十二分間とす、（医者の診察又は介添人の云々する時間を除き正味丈け）生等の実見せしは都合五組にして、内三組は多少の意趣あり、名誉恢復の為に決闘せしものなり（二十二分間なり、此種のもの多時に渉る）その相闘ふや刀々相撃ち^{かつかつ}戛々として火花を散し血迸り、肉飛ぶ満場忽ちにして修羅場となり、流血淋漓式場為に滑なり、其惨状観者をして覚へず心神飛躍せしむ、蓋亦壮なりと謂ふべし、その闘了るや双方欣然手を握り、「鬱憤を散じ大に満足したり」との挨拶を為して相別る、容子、威あって猛からざる真正武士の振舞とこそ見受られたり、是於医者は直ちに手術を施せり、其迅速なるは亦驚くべきなり、右十人の中二三ヶ所以上六七ヶ所創を受けざるはなし、其内一人にして満頭満頬爪の如く、二十余創を蒙りたる者あり、其顔色蒼白となるに拘はらず療治を受けつゝ欣然ビールを飲みつゝあり、斯の如く猛烈なる果合を為すに当たり双方の党興、毫も反目疾視の状なきのみならず、彼我の間に礼儀を^{みだ}紊さず、平和円満にして秩序を保ち居る事、想像の外にあり、而して右創を被れる面々は、ホウタイの儘日々大学校に勉強しつゝありと云ふ…

佐々がこれを書いたのは決闘が行われから10日後であるが、非常に写實的・客観的な描写になっている。それは彼が強い興味を持ちながら冷静な目で決闘を観察したことを示している。内容的には決闘を野蛮なものではなく、武士道にも適うものと見ている。

決闘試合が終了後、佐々らは飲酒会（打ちあげ）に招待された。会場には党員が大勢いて、内、議長が1名、副議長1名が上席を占め、各自長幼の序により正座し、長テーブルに着いてビールを飲んでいて。佐々らが到着すると皆起立して例の如く、一々脱帽握手し、三人は議長の隣席に案内された。佐々は特に学生たちの合唱に感銘を受けたようだ。

「議長の指揮に依り各自の卓上に歌書並に楽譜（二百年来歴史あるもの）を按し、席中の少年ピアノを弾す、衆之に和し、一斉放歌、満場為に動く、其真率無邪氣にして可愛の状態、恰

も我邦十四五歳の少年に似たり、既にして双々相携へて舞ふ者あり、起て演舌するあり、時に稍々混雑を極むる時は議長起て『叱』の一声を発すれば満場肅然たり、…」

佐々は余りの愉快さに興に乗り、八、九杯のコップを傾け、ついに立って演説を始めた。

「此決闘並団結は独逸国の精神と認む、願くば諸君之を保存せよ、之を発揮せよ。
従て貴党並独逸国の万歳を祈る」

これを藤村義朗が英語で通訳した。大学生なので大抵は英語を理解した。すると満場立って大杯を傾け、日本万歳を祝した。次いで党員の先輩で陸軍士官から今は警部長に転じた男が立って演説し、日本帝国万歳を祝した。これに対して佐々が帰国後、日本刀一振りを貴党に寄贈することを約束すると、党員たちは大喜びだった。佐々らはジョッキと歌集と楽譜を買って明け方近くホテルに戻った。

以上が佐々がベルリンで目撃したドイツ学生の決闘と、その後の自ら参加した飲酒会の全容であった。それが彼に済々黌長時代を想起させたことは、書簡の最後に「生済々黌に在るの當時を追想し、覚えず興に入り之を記す」とある通りである。前述のように、ドイツ学生の間に決闘の風習があるのを知ったのも多分当時だった。

『克堂佐々先生遺稿』には「独逸帝国伯林ブランデンブルグ団体への書簡」が収められている。内容は、一昨年のドイツ訪問では決闘とビール会に出席し、貴国の人々の雄壮活発な精神に触れ感銘を覚えたこと、貴国人の親切な待遇に感謝したいこと、こうした体験は遊歴中最も愉快だったことを述べ、最後に議会解散などのため多忙で遅れたが、約束の日本刀2本を贈るといったものであった。さらに佐々は別紙に得意の漢詩と和歌2首を添えて贈っている。和歌は「独逸国大学生のはたしあいを観てよめる」と題する次のごとき作であった。「太刀打になかすちしほは武士の赤きこゝろの花にぞありける」「つるき太刀鐔音たかき武士の手振は国の宝なりけり」。

とにかく佐々ほどドイツ学生の決闘の風習に共鳴し、これを讃美した人も珍しい。それは彼がそこに武士道精神を見たからに他ならないが、彼の経歴と教育方針から考えても不思議ではない。彼自身武家の出であり、西南戦争では池辺吉十郎の下で官軍と戦った。

その後戦争で荒廃した世相を憂え、烈々たる気迫で同心舎を興し、そして済々黌の創設に至った。その際いわゆる三綱領を発表したが、その一つに「廉恥ヲ重ジ、元気ヲ振フ」とあった。つまり剛毅を重視した。欧米視察後の佐々について『明治過去帳』は「欧米を漫遊後独逸の政体を崇賛し国権的信念を固め御用党の旗頭として終始政府擁護の地位に在り」と記している。

まとめ

佐々友房は自身洋学者ではなかったが、洋学にも関心があり折りに触れて洋学観を語った。熊本において独逸学が本格的になるのは明治20年(1887)に官立の第五高等中学校が設立以後のことであるが、それ以前の熊本において独逸学の重要性を認識し、論じまたそれを導入することに熱心であった人として佐々友房の右に出る者はいなかった。その意味で彼は熊本独学史から逸することの出来ない存在である。

佐々が独逸学に興味を持つようになったのは紫溟会を結成した頃で、丁度中央で躍進するドイツの国体と国風に親近感を持つ人々によって独逸学協会が設立された時期と重なる。彼は協会員ではなかったが、その動向に注目し出版物に影響を受けた。特にローレンツ・フォ

ン・シュタインの『国理論』（荒川邦蔵訳）に共鳴し、全体を『紫溟雑誌』転載した。それをがきっかけとなり『紫溟新報』にはドイツ関係の記事が目立って増加したが、その中には独逸学協会の基本方針とも言えるロesslerの「独逸学ノ利害及国家ニ対スル得失」などもあった。同紙には各地の諸学校でドイツ語が教えられているとの報道も度々載った。そして明治18年9月に至り佐々覺長は済々黌にドイツ語を導入した。開講に当たり生徒たちに語った「独逸学科を設けし時の談話」において佐々は独逸学や洋学について率直かつ熱く語った。佐々はその中で、ドイツは他の諸外国に比べて学術が盛んで、医学だけでなく政治、経済、法律等においても大いに進歩していること、ドイツの国体つまり立憲君主制は我が国と類似しているので斯学を講じ、修め、活用すれば日本の発展に役立つこと、英学でも仏学でもまた独逸学といっても、いずれも外国の学術であるので長所を採り、短所は捨てればよいこと、従って英学者、仏学者、独逸学者が互いに反目したり、敵視したりするのは狭量であること等を説いた。当時済々黌は経営的に苦しかったが佐々は生徒のために高給でドイツ語教員として東京で翻訳などに従事していた山縣良蔵を雇い入れた。だが熊本に官立の第五高等中学校が設置されて以後、済々黌のドイツ語は急に衰退した。佐々はドイツ語は尋常中学の済々黌よりも第五高等中学校で教える方が相応しいと考えたようだ。それでも独逸学の優秀性、重要性に対する彼の信念は変わらなかった。その後『紫溟新報』に3回に亘って発表された「独逸学の盛衰」は前記「独逸学科を設けし時の談話」を敷衍したもので、より広い視点から論じている。ここで強調したのは欧米各国の学問を摂取することと、その制度を取り入れることは区別し、両者を混同してはならないということだ。深遠で精緻な独逸学を、ドイツの政治に武断圧制的な傾向があるからとの理由で排斥することは間違っている。哲学、文学、科学等の「深遠精緻なる知識」を得て専門的学問に従事しようとすれば到底独逸学を廃することは出来ない。森文部相による英語重視、つまりドイツ語冷遇政策については、今の独逸学の衰頹は一時的なものであって、我が国の学問が進歩するに従って独逸学が益々重要になることは必然だとしている。苟も専門の学問をする者は英仏独の3カ国語位は修得して欲しいとも述べている。明治30年衆議院議員の佐々は欧米視察旅行の途中ベルリンでドイツ大学生の風習である決闘を実見し、大なる興味を以てその様子を詳細に描写した。そして決闘は野蛮なものではなく、武士道にも適うものと見て、讚美した。欧米視察後、佐々はドイツ政体を崇拜し国権的信念を固め終始政府を擁護した。彼と交友関係にあった人々には独逸学者やその信奉者或いは親独的な人が多く含まれているのは、¹⁶⁾ その反映であり結果であったと見てよい。

注

- 1) 荒川邦蔵（1852 - 1903）明治期の独逸学者。官僚、政治家。長州出身。明治3年、池田謙斎、大沢謙二、北尾次郎、山脇玄、相良玄貞等と共に大学東校から派遣されベルリン大学に留学した。この間青木周蔵の助言により専攻を医学から法学に変えた。明治7年帰国。14年9月独逸学協会創設に参加、協会第一委員長。明治25年福井県知事、内務省地方局長、衛生局長。
- 2) 中正主義：薩長の藩閥政治や板垣退助の急進な自由主義とも異なる、穏健な保守主義
- 3) リョースレル（Herman Roessler, 1834 - 94）ドイツの法学者。エアランゲン大学に学んだ。1878年（明治11）ロストック大学国家学教授のとき日本外務省法律顧問

- 問として来日し、伊藤博文、井上毅らの憲法起草に協力した。94年(明治27)帰国。条約改正交渉にあたり日本の利益のために主張した。ロエスレル。
- 4) 詳しくは拙稿「熊本における最初の独語教師山縣良蔵」(『文学部論叢』地域科学篇60号、熊本大学文学部、1997年3月)を参照されたい。
 - 5) 『熊薬七十五年史抄』(1960年)によると、済々黌に独逸科が置かれた明治18年に私立薬学校が設置されドイツ語が教えられたといい教科書も記されている。また済々黌や第五高等中学校で一時嘱託独語教師を務めた藤本末松の履歴書(五高記念館蔵)には明治19年11月18日に「熊本県中学校独逸語教授ヲ委嘱セラル」とあるので、既にこの頃熊本県中学校でもドイツ語の授業が行われていたことが分かる。
 - 6) 『熊本県教育史』(上巻、1931年)695-98頁。
 - 7) 『紫溟新報』第882号(明治18年9月8日)の「雑報」欄は次のように報じている。「○ 済々黌独逸学教師 今般東京より聘せられし独逸学教師山縣良蔵氏は一昨六日着熊されしを以て本日より愈授業に取係らるよし」。
 - 8) 明治21年5月23日及び24日付『紫溟新報』によると、山縣は山鹿温泉までシュタインを出迎え、さらに田原坂に西南の役の戦跡を訪ね、熊本市内では水前寺公園などの名所を案内したほか、済々黌ではシュタインはドイツ語に授業も参観したという。
 - 9) 熊本大学の五高記念館蔵『職員履歴』には上田茂次郎の詳細な履歴書が収められている。済々黌時代の明治19年9月3日の条には「全黌普通科設置ニ付更ニ普通科ニ転ジ式年間修業」とあり、ドイツ語を学んだと推定される。なお、上田について詳しくは上村直己『九州の日独文化交流人物誌』(2004年)所収の「熊本薬専教授上田茂次郎」を参照されたい。同書90-91頁。
 - 10) 『五高五十年史』(1939年)、92-94頁。
 - 11) 明治19年12月20日森有礼文部大臣により第一高等中学校の本科及び予科の第一外国語は英語とし、明治24年7月以降入学試験の外国語は専ら英語によるとの法令が出された。これはドイツ語関係者の深い失望を招き、反対の声が絶えなかった。結果これは明治23年4月30日に至り森文相の後任榎本武揚によって改められ、従来の通り入学志望者の希望により英語または仏語または独語を以て施行することになった。これを祝って同年5月18日大学講堂で多数の在日ドイツ人学者や青木周蔵らが支援し、大学(医学部・独法科)や学習院、独逸学協会学校生が大挙してドイツ語復活祭を開いた。
 - 12) 佐々友房『戦袍日記』(青潮社、1986)所収「佐々友房略譜」(佐々瑞雄編)。
 - 13) 藤村義朗(1871-1933)藤村紫朗の3男。英国ケンブリッジ大卒。三井鉱山から三井物産に移り、ロンドン支店長を務めた。清浦内閣で逓信大臣。
 - 14) 萩原守一(1868-1911)山口生まれ。外交官。明治28年(1895)帝国大学卒業後、外務省に入る。30年(1897)ベルリン公使館に勤務。その後ベルギー、韓国、米国の公使館書記官を歴任。日露戦争後、奉天総領事。のち外務省通商局長を務めた。
 - 15) 古莊 ^{つづむ} 韜(1865-没年不詳)熊本国権派の古莊嘉門の長男。1886年(明治19)ドイツ留学、ベルリン、イエーナ、ハイデルベルク、ゲッティンゲン各大学で学ぶ。89年(明治22)帰国。一時学習院に勤務したが、熊本に帰り市参事会員。父嘉門の死後、古莊家の家督を相続。

- 16) 佐々友房関連文書目録（国立国会図書館）を調べると、品川弥二郎、伊藤博文、山懸有朋、青木周蔵、桂太郎、平田東助、井上毅など当時の有力者たち宛の書簡があり壮観である。

{付記}：本稿は2013年7月27日に長野県軽井沢町で開催された日本独学史学会夏季研究会で口述発表した原稿に加筆して成ったものである。